



Title	集会施設の建築計画に関する基礎的研究
Author(s)	森田, 孝夫
Citation	大阪大学, 1982, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/33063
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed 大阪大学の博士論文について

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏名・(本籍)	森	田	孝	夫
学位の種類	工	学	博	士
学位記番号	第	5537	号	
学位授与の日付	昭和	57年	2月	24日
学位授与の要件	学位規則第5条第2項該当			
学位論文題目	集会施設の建築計画に関する基礎的研究			
論文審査委員	(主査) 教 授 岡田 光正			
	教 授 足立 孝	教 授 川崎 清		

論文内容の要旨

本論文は、多目的ホールや市民会館、公民館などのような集会施設の平面計画や施設配置計画などについて、利用実態調査その他の方法による建築計画学的研究を行なったもので、序論と6章から構成されている。

序論では、まず集会施設を定義し、本研究の目的、研究方法および関連する既往の研究などについて述べている。

第1章では、集会施設の全国的な規模分布を経営主体別に調査し、延床面積や定員、室数および面積配分の特徴を明らかにし、規模別、種類別、経営主体別に性格内容と規模との関係を分析している。

第2章では、利用圏域に応じて段階構成される各レベルの集会施設について、そのプランタイプやオーディトリアムのセクションタイプなどを類型化して分析、評価し、その結果を設計資料として集約している。

第3章では、主として近畿都市圏の集会施設を対象として利用実態を調査し、利用者の属性、利用目的、曜日変動や季節変動、利用頻度、利用圏、利用上の問題点および立地条件と利用傾向の関係などを明らかにしている。

第4章では、来館経路、利用水準の評価尺度、利用圏分析の手法、負担人口および利用距離などに関する考察を行ない、さらに市民会館の利用圏分析から、距離以外の要因が利用水準の形成に関与していることを確めて、需要人口率を定義し、それを算定した結果を示している。

第5章では、延27回におよぶ大阪府民劇場の調査から、多目的ホールで公演される音楽、演劇、芸能等に対する需要の詳細を明らかにしている。また、さらに需要量と需要圏の大きさが、公演の種類

と開催地に対応して法則的に変化することを見出し、それを利用して需要人口率関数を導くための理論モデルを構成、そのモデルを用いて集会施設の配置体系を改善、適正化する方法を提案している。

第6章では、各章の内容を総括している。

論文の審査結果の要旨

集会施設は地域社会における生活基盤施設のひとつとして重要な社会的役割をなうものであるが、時代の変化と共にその利用要求も多様化し、従来のような施設内容では対応できないことが多いっている。このような状況をふまえて本論文は、近隣住区から、市域、県域に至る各レベルの集会施設の実態を詳細に調査、分析して、規模、プランタイプ、面積配分、機能、運営方法、利用圏、施設配置などに関する重要な事項を、設計情報として集約すると共に、施設計画の新しい考え方と手法を論じたものである。

とくに平面計画については、小地域を対象とする場合、十分な多用途性と転用性を備えた空間が要求されることを具体的に示し、より広域をカバーする施設にあっては、規模の異なる二種類以上のオーディトリアムが必要であり、かつ利用圏に応じてプランタイプが変化することなど、多くの設計上重要な事項を明らかにしている。また、利用者の属性や需要圏の調査から、公演の種類などによる利用距離の変化をとらえ、あらたに需要人口率関数という概念を導入して需要発生をモデル化し、それを用いて施設配置を適正化する方法を提案している。

以上のように本論文は集会施設の計画に関して、多くの新しい知見を得たものであり、建築計画学の発展に寄与するところが大きい。よって、本論文は博士論文として価値あるものと認める。